五女子大学コンソーシアム
合同国内スタディツアー
実施報告書

2024年12月

お茶の水女子大学グローバル協力センター

五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー実施報告書

目次

はじめに 3

１．事業の概要 5

１．１　事業の目的 5

１．２　実施スケジュール 5

（１）　募集選考 5

（２）　事前学習（オンライン） 6

（３）　スタディツアー実施：2024 年 9 月 2 日（月）～2024 年 9 月 7 日（土） 6

（４）　報告会（オンライン）：2024 年 10 月 7 日（月） 6

１．３　実施場所 6

１．４　スタディツアー日程 6

１．５　参加者 9

２．参加者報告 9

３．訪問記録 27

４．資料 38

（１）参加学生によるアンケート回答 38

（２）スタディツアー実施中の写真 42

（３）オンライン報告会（10 月 7 日）の模様 43

①　学生発表資料（一部） 43

②　報告会参加者写真 47

はじめに

お茶の水女子大学グローバル協力センターは、国際協力・平和構築を中心とした国際的な課題に関する教育研究と、これらを通じた女性リーダーの育成、開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援とを２つの柱とし、開発途上国や国際協力の現場から学ぶ授業、大学院生の海外調査支援、幼児教育分野の人材育成のための研修、他大学と連携した活動等に取り組んでいます。これらの事業・活動は、「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成－女性の役割を見据えた知の国際連携－」事業とその他の資金により運営されています。

本冊子は、これらの事業・活動のうち、開発途上国の女子教育支援や女子教育の発展に向けた女子大学間の連携枠組みである「五女子大学コンソーシアム」にもとづく事業の一環として、2024 年 9 月 2 日～7 日に実施された「五女子大学コンソーシアム合同海士町スタディツアー」の実施記録と参加学生による報告を取りまとめたものです。

お茶の水女子大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学から参加した８名の学生は、地方創生と国際協力を推進する日本海に浮かぶ離島、島根県隠岐郡海士町（あまちょう）において、シェアハウスでの共同生活をしながら、町役場の皆様をはじめとする多くの関係機関・関係者を訪問しお話を伺うとともに、ボランティア活動なども体験しました。文献やインターネットによる情報ではなく、島の自然を感じながら、島で暮らし島の活性化に取り組む人々と直に触れ合うことによって、地方創生や国際協力に対する理解を深め、自身の今後のキャリアや生き方などを考察する機会にも恵まれました。

今回のスタディツアー実施にご協力・ご支援をいただいた海士町役場の国際協力コーディネーター河添靖宏様、森田瞳子様はじめ海士町関係者の皆様、五女子大学コンソーシアム関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

2024 年 12 月

国立大学法人お茶の水女子大学

グローバル協力センター長　由良　敬

１．　事業の概要

１．１　事業の目的

五女子大学コンソーシアムは、日本政府のアフガニスタン復興支援において、お茶の水女子大学、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学が連携し女子教育支援に取り組む協力枠組みとして 2002 年に締結された。同コンソーシアムのもと、五女子大学は連携し、アフガニスタン女子教育復興のための女性教員研修を実施し、2002 年から 2012 年の間、女性教員など 169 名を受け入れた。同コンソーシアムは、2006 年より支援対象を開発途上国の女子教育に広げている。

このたび、五女子大学コンソーシアムは、海士町役場及び日本政府の国際協力実施機関である JICA（独立行政法人国際協力機構）と連携し、地方創生×国際協力の様々な取り組みを実施している島根県隠岐郡海士町（あまちょう、日本海の離島）で、国内の地方創生と国際協力がどう結びついているのか、その現場に直接触れ理解を深めること、同じ関心を持つ他大学の学生との密な交流を通してネットワークを形成することを目的に、五女子大学合同国内スタディツアーを開催した。

本スタディツアーは、アフガニスタンをはじめとする開発途上国の女子教育支援を支援するため、2012 年にお茶の水女子大学卒業生の故野々山恵美子様の遺贈を原資として設立された「野々山基金」を活用し実施された。

１．２　実施スケジュール

（１）　募集選考

以下の内容で各大学が募集選考を実施し、2024 年 6 月にお茶の水女子大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学から各 2 名、計 8 名の学生の参加が決定した。津田塾大学からは、秋学期開始時期との兼ね合いから応募者がなかった。

①　募集時期：2024 年 4 月上旬～5 月中旬

②　定員：各大学 2 名まで、全体で 10 名まで（応募者多数の場合は各大学で書類・面接審査の結果を踏まえ 2 名に絞り込み）。

③　応募資格：

・五女子大学の正規の学生（学部・大学院博士前期課程に在学中の学生）であること。

・国際協力と地方創生に関心があり、健康面の支障がなく、日本語でのコミュニケーションが可能なこと。
・事前・事後の学習・オリエンテーション（基本的にオンラインでの実施）に参加可能なこと。

（2） 事前学習（オンライン）

第一回：2024 年 7 月 10 日（水）
第二回：2024 年 7 月 24 日（水）
第三回：2024 年 8 月 7 日（水）
直前打ち合わせ：2024 年 8 月 30 日（金）

（3） スタディツアー実施：2024 年 9 月 2 日（月）～2024 年 9 月 7 日（土）
詳細日程は「1．4」の通り。

（4） 報告会（オンライン）：2024 年 10 月 7 日（月）

海士町副町長、郷づくり特命担当課長他、現地実習時に対応いただいた関係者及び五女子大学コンソーシアム関係者の出席のもと、オンライン報告会を開催した。ツアー参加学生からは、スタディツアーで学んだこと、現地実習前に立てた目標の達成状況、今後に向けた抱負などの発表があった（大学の授業と重なり、リアルタイム参加ができなかった学生は録画での発表）。

1．3 実施場所

島根県隠岐郡島前地域（西ノ島・海士町）

1．4 スタディツアー日程

（1） 奈良女子大学以外の参加者：9 月 2 日（月）羽田空港に集合→米子空港→タクシーで鳥取県境港着、9 月 7 日（土）境港→電車で米子空港→羽田空港着・解散
（2） 奈良女子大学の参加者：9 月 2 日・7 日とも海士町へのフェリーが発着する境港での合流・解散
（3） 境港からフェリー（隠岐汽船）・内航船で移動（片道 3 時間－3 時間半）

【詳細日程】

No.	月日	活動内容	場所・交通手段等
1	9/2 月	境港→（西ノ島）別府港→菱浦港	フェリーしらしま→内航船いそかぜ
		移動（菱浦港→町営シェアハウス）	借り上げバス
		夕食準備・夕食（朝食準備）	徒歩にて移動・シェアハウス
		振り返り（翌日からの日程確認）	シェアハウス
2	9/3 火	朝食（昼食準備）	シェアハウス
		海士町内視察（ジオラウンジ、宇受賀命神社周辺、明屋海岸、開発センター着）	借り上げバス
		昼食後、濱中香理 海士町教育委員会共育課長／郷づくり特命担当課長による海士町概要説明および意見交換	海士町開発センター和室
		JICA グローカルプログラムの説明（活動事例視察）	隠岐神社周辺（徒歩）
		阿部裕志（株）風と土と代表取締役による講義「海士町が持つ資源を活用した事業について」	村上家資料館（徒歩）
		夕食準備・夕食・振り返り	シェアハウス
3	9/4 水	朝食（昼食準備）	シェアハウス
		シェアハウス→菱浦港	レンタル自転車
		菱浦港発、西ノ島・別府港着（フェリーどうぜん）	自転車積み込み
		西ノ島みた保育園へ移動	レンタル自転車
		ボランティア活動（子どものおもちゃ作り、子どもたちの遊び場整備）・昼食	西ノ島みた保育園
		西ノ島視察（摩天崖（通天橋）など）	海士町所有バス
		別府港発、菱浦港着（フェリーどうぜん）	自転車積み込み

		菱浦港→シェアハウス	レンタル自転車
		夕食・振り返り	シェアハウス近くの食堂
4	9/5 木	朝食（昼食準備）	シェアハウス
		日須賀地区へ移動	レンタル自転車
		宮岡健二 海士町教育委員会共育課地域共育コーディネーター・ジオパーク特命担当によるグローカルプログラム概要・地方創生の取り組み説明、海岸清掃・旧通学路整備等のボランティア活動	日須賀地区
		日須賀地区→シェアハウス	レンタル自転車
		夕食・振り返り（夕食後、隠岐國学習センター視察）	菱浦地区のレストラン・隠岐國学習センター
5	9/6 金	朝食（昼食準備）	シェアハウス
		自由行動（シーカヤック体験、海士町島内観光等）	レンタル自転車
		昼食後、海士町役場幹部（中川覚敬副町長、吉元操海士町魅力化政策顧問）との面談	町役場内会議室
		河添靖宏 海士町役場・JICA グローカルコーディネーター、森田瞳子 海士町役場・JICA 国際協力コーディネーターによる海士町と国際協力に関する説明、意見交換	海士町開発センター研修室
		島留学生・JICA ボランティア経験者・スタディツアー受入関係者との懇談会（帰路は海士町関係者所有車両による移動）	日須賀地区公民館
6	9/7 土	朝食・シェアハウス片付け	シェアハウス
		移動（シェアハウス→菱浦港）	借り上げバス
		菱浦港発⇒境港	フェリーしらしま

１．５　参加者

氏名	所属
長束　　文	お茶の水女子大学生活科学部人間生活学科生活社会科学講座３年
山田　有紗	お茶の水女子大学生活科学部人間生活学科生活文化学講座３年
大村　帆南	東京女子大学現代教養学部国際社会学科コミュニティ構想専攻１年
坂爪　里帆	東京女子大学現代教養学部人文学科歴史文化専攻２年
島崎　睦巳	奈良女子大学文学部文化学科日本アジア言語文化学コース４年
山本　　舞	奈良女子大学文学部人文社会学科２年
岩田　綾奈	日本女子大学人間社会学部教育学科４年
鏑木　彩佑	日本女子大学家政学部児童学科４年
引率	
小田　亜紀子	お茶の水女子大学グローバル協力センター　副センター長

２．　参加者報告

（１．５の参加者リスト順）

長束　文

お茶の水女子大学・生活科学部人間生活学科生活社会科学講座３年

１．スタディツアー全体を通じて感じたこと・印象に残ったこと

スタディツアー全体を通して、海士町での体験、人との繋がりが自分の体をあたたかく包み込んでくれた。一番強く感じたのは、人とのつながり、あたたかさである。すれ違う人とは毎回挨拶を交わしたり、店員さんが話しかけてくれたり、急に行った銭湯では、同じ利用者と日常会話が生まれたり、本当にたくさんの場面で人とのつながりを感じた。東京で暮らしていて、すれ違う人の顔を見ることはあまりなく、電車やバスの待ち時間はスマートフォンを覗き込み会話が生まれることなんてなかなかない。１第三者、「よそ者」として、この島に１週間滞在する、というだけなのに、ここまで海士町の人があたたかく迎え入れてくれて、自分というものに向き合ってくれている感じが本当にありがたかった。この「よそ者」というのは、ただ「よそ者」とするのではなく、よそ者の視点を取り

入れながら、「共につくり、共に変わる」ということで島づくりを行なっていて、この感覚を島の人が大切にしていることを実感した。海士町フィールドワーク 1 日目に訪れた「ENTO」の Geo Room で“Discover”が真っ白で作られていたが、これは、「海士町を実際に見て、本物だけが持つ色、音、匂いを感じて自分の色で染めてほしい」という想いが込められているということだそうだ。このことを知って、最終日、「海士町はどんな色であったか」を自分の中で問うてみると、本当にいろんな色に染まっていった。海の色、風の色、山の色、海士町のあたたかい人との対話の色、美味しい海の幸の色、星の色、どの色も自分を包み込む、本当にあたたかい色であると感じた。

一つ印象的な場面を紹介する。銭湯に行った時、地元の方に話しかけてくださった。私がスリッパの出し方がわからず、履かずに入った時に、地元の方が、私たちがスリッパを履いていないことに気づき、「ここにスリッパをこうやって出すんだよ」と教えてくれた。その時に、私は咄嗟に「すみません」と言った。すると、地元の方は「なんで謝るの、悪いことなんてしてないじゃない、ありがとうでいいのよ」と言ってくださった。ハッとなった自分がいた。自分の口から自然に「すみません」という言葉が出ていたこと、それをスルーせずに「ありがとうでいいのよ」と伝えてくれたこと。本当にちょっとした場面であるが、なんだか包み込んでくれている感じがした。

また、このツアーの中で、自分の無力感を味わった場面があった。それは、日須賀地区の浜辺のごみ清掃を行なった時である。日本、中国、韓国などのペットボトル等のゴミが広がっていた。30 分程度のゴミの清掃をし、ゴミ袋 10 袋近く集めたが、果てしなくゴミは残っていた。宮岡さんにお話を聞くと、多額のお金をかけて業者に頼んで清掃をして、一旦きれいにしても、台風などが一回来てしまうと元通りになるという。高校時代に、海洋ごみ問題について学び、その深刻さを知っている、と自分の中で思っていたが、本当に「自分ごと」として捉えることができていたのだろうかと思った。この光景を見て、誰も責めることができない中で日々清掃をしていることは到底想像できていなかったと思った。実情を見て、自分がした清掃は本当に小さな力にしかなれなかったことの悔しさ、何か自分がしたい気持ちと東京にいて何か力になることができるのだろうかというもどかしさなど色々な気持ちが心の中で込み上げた。

２． スタディツアー参加前に立てた到達目標の達成状況

今回のツアーの「ないものはない」というキャッチフレーズに惹かれて参加したが、ツアー前は、地元の人が、どうやってこの「ないものはない」を体得しているのか学びたいと考えていた。しかし、これは逆方向であることがわかった。ツアーを通して、島の人の島を愛し、島を誇りに思い、前向きな思考が、“便利なものはなくても良い”、“人が生きていくために大切なものは全てある”という「ないものはない」海士町をかたちづくっていることがわかった。また、今回、人との和を大切に、目まぐるしく過ぎ去る日々で、なかなか気づくことができない自分にとって大切なことを考える機会を持ち、自分の考えの幅を広げたいと思っていた。これは、都会にいた自分が、周囲の目を気にして、人と比べて、何かずっと焦りながら、時間だけが過ぎている感じがしていたからである。何をするのにも、理由を問われ、何かに挑戦することに少し高いハードルを感じてしまう私は、やらない理由を見つけようとしてしまう。そんな自分を何か変えたいなと思っていた。短い期間であったが、海士町の人と関わることで、自分としっかり時間をとって対話してくれている感じが、「自分」はどう考えるのか、「自分」は何を大切にしたいのかを瞬間瞬間で考える機会となった。まだその正解は探り中であるが、海士町の大人の島留学の方や島体験の方の話を聞いて、気になること、これだと思ったこと、何かに飛び込むこと、挑戦することに臆さないことの先に自分らしさがある、ということに気づいた。また、阿部さんの「10 回やる気持ちで良い、1 回目から成功しなきゃと思わなくていい」という言葉は、何か自分の背中を押してくれる言葉となった。

３． 今後の学習や研究に向けた抱負

今回、海士町を訪れて、自分の中で、「都会と地方」という比較軸ができた。今まで、ずっと関東圏に住み、祖父母も関東だったため、「地方」は身近でなく、地方という点にフォーカスすることができなかったが、この機会を活かして、物事を考える時に、「東京を軸」ということから抜け出したいと思う。今回隠岐島前高校の生徒や先生にもお話を聞くことができ、島の教育、探究活動に興味を持った。都会の便利なもの、ネット社会、情報に溢れた環境での探究活動と、海士町のようなフィールドが豊富な環境での探究活動の比較等も興味深い。また、今回心に残った、海洋ごみ問題に関しても、離れた環境からでもできる支援の形等を考えていきたい。

山田有紗
お茶の水女子大学　生活科学部人間生活学科生活文化学講座　3年

１．スタディツアー全体を通じて感じたこと・印象に残ったこと

海士町で過ごす中で強く感じたのは、居心地のよさである。初めて会う私たちでも誰だろうかと不思議がられることもなく、通りすがりの学生も大人も、笑顔で顔を合わせてあいさつを交わすことができるのがとても気持ちが良かった。自転車をこいでいると自分から聞く前に町の人から道案内をしてくれたり、ライトがついていなかった時に自転車を止めてつけかたを教えてくれたり、人を気にかけて助ける優しさに何度も触れ感動した。人柄と共に、自然も居心地のよさを感じる要因となっていたと思う。朝日と歌で目覚め、隣町へはフェリーでゆっくりと景色を眺めながら移動し、夕方は西日が沈むのを見て、夜は満天の星を眺める、時の流れを自然によって感じる生活では、時計を見て動く生活よりも心穏やかに過ごすことができた。

そして海士町では前向き精神が根付いていると感じた。日須賀地区でグローカルプログラムについてのお話を聞いた際、島外の人を受け入れることへの抵抗はないかという質問に対し、マイナスなことを考えていても仕方がないという回答をしていたのが印象に残った。海岸清掃でも、ゴミを見るのは辛いが、拾っていると貝のような宝物が見つかると話していて、流れついたゴミを拾うという心苦しい作業の中にも楽しさを見いだし前向きに捉えていると感じた。便利なものはないが、ないならば作ればいい、生きるために大切なものは全てある、という海士町の「ないものはない」精神には、プラスへの転換思考があると理解した。人とつながり助け合う温かさや前向きな思考を持つ海士町には、地域との交流がなく、ないものは買ってしまう今の私の都会暮らしにむしろ「ないものがある」と感じた。

地方創生のためには、定住者でもなく観光で来た交流人口でもない、関係人口を増やすことが求められると学んだ。事前学習として『海士町エンジン全開計画』を読んだ際には人口増加の数値目標が掲げられていたため、定住人口を増やすことを目指しているのだと思っていた。しかし、町の方から政策について聞くと、はじめから移住者を増やそうとしているのではなく、まずは海士町について知ってもらいたいと考えていることが分かった。1週間以内の短期の観光や研修、3ヶ月の島体験、高校3年間の島留学や、海士町にいなくても関われるオフィシャルアンバサダー制度など、海士町とは様々な関わり方があ

る。町にとっては島を知り魅力を感じてもらう機会が増え、島外の人にとっては移住や就職以外の選択肢があることで島を訪れやすく、またいつでもどこからでも海士町と関われることで自分のもう一つの居場所があるという安心感が得られ、双方にメリットがあると思った。様々なきっかけから海士町に惹かれ結果的に移住希望者が増えるのだろうと考え、定住ではない期間限定の人の受け入れ政策の意義を理解した。人口減少が進んでいく日本においては、定住人口の増加だけを狙っていると人口の奪い合いになる、という考えにも納得した。これからは複数の地域に拠点を持ち継続的に交流を保つという方法もあり得ると思った。

また、グローカル生によって整備された山の中の通学路に再び草木が生い茂り通れなくなっているのを見て、取組みを地元の人が継続することの難しさを感じた。そこで研修や島留学等で新たに来た人の存在が生かせると思った。島外の人にも共感を広げ、地域の人と共に町の歴史や景観を守る取組みを行うことができる。地域のことは地元の人だけではなく、外の人も積極的に関わっていくことが今後の地域の望ましいあり方ではないかと考えた。

２．スタディツアー参加前に立てた到達目標の達成状況

参加前に、「観光客を超え、島民や町の関係者の思いに踏み込む」「真に豊かな生活とは何かの答えを見つける」という目標を立てた。1つ目の目標に対しては、講義やボランティアなどの各時間に1つは質問をし、理解を深めるよう努めたことで達成できたと考える。1日の終わりにその日の活動や聞いた内容を振り返り、文章に記しながら学び得たものを整理した。また翌日の活動で何を学びたいか目標を立て、翌日はその目標を達成できるように心がけたことで、実質4日間の短い期間でも地方創生、国際協力との関係、海士町の人々の精神について多くのことを学ぶことができた。

そして様々な人の話を聞き活動をする中で、真に豊かな生活とは何かの問いにつながる多くの手がかりを得ることができた。人とのつながり、安心感、前向き、心のゆとりなどたくさん挙げられたが、現時点での考えをまとめると、豊かさとは人とつながり前向きに暮らしを創造できることではないかと思う。人と会い交流することで地域に受け入れられる安心感も思い出も助け合って困難を乗り越える力も生まれ、自分にとって面白いものを創り出していくことで生き生きと暮らせるのだろうと思った。

３． 今後の学習や研究に向けた抱負

豊かな生活について、これからも追究していきたい。海士町では地方の暮らしの豊かさを感じることができた。それを整理した上で、生活文化学講座の授業の中で海外の暮らしや過去の暮らしからも豊かさについてさらに考えたい。

また外からの人、意見を受け入れることの意義と課題の解決策についても考えたいと思う。島外の人の視点によって島の人にとっては当たり前だった歴史や食の価値に気づくことができるという話を聞き、自分が専攻の中で特に興味を持っている、日本から世界を、世界から日本を見ることで自文化を振り返る比較文化論の考え方と同じだと感じた。海士町では島外の人も快く受け入れ歴史の発掘や産業の創出につなげることができていたが、日本では未だ外国人労働者など、外部の人の受け入れに課題もあるだろう。海士町の姿勢と比較文化の思考で多様な人が交わることの可能性と課題の乗り越え方を考えたい。

大村　帆南

東京女子大学現代教養学部国際社会学科コミュニティ構想専攻１年

１． スタディツアー全体を通じて感じたこと・印象に残ったこと

海士町での６日間では多くの体験を通して様々な学びを得ることができたが、最も印象に残っていることは海士町や西ノ島の方々との交流である。海士町の方々へのインタビューや対談から、海士町に元から住む方々が示す受け入れの姿勢と海士町に移住された方々の能動的な姿勢に触れ、自らの心が揺さぶられた。事前学習を通しての関心のひとつに、新しいものやひとを受け入れる現地の方の姿勢について挙げた。なぜなら伝統を覆すような新しい政策の受け入れには地元の方々の反感が付き物であると考えており、反感について、またそれを防ぐための策について学びたいと考えたからである。これはスタディツアーの舞台が新しい政策を多く行ってきた海士町であるからこその関心であった。しかし、実際に現地に赴いて昔から海士町で暮らす方や役場の方のお話を伺ううちに海士町においてこの疑問は間違っていたことに気が付いた。お世話になった、長年 JICA のグローカルプログラム生を受け入れている地区の方との質疑応答の際に、JICA のグローカル生の受け入れについて質問があった。そこでその方は受け入れの際のデメリットはあまり感じないとお答えになり、さらにデメリットは考えないようにしているとお話をされた。また、

海士町役場の幹部の方は前向きな思考を大切にされており、ネガティブなってもしょうがないと仰った。それだけでなく、すれ違った方との挨拶やちょっとした会話からでさえもよそ者をコミュニティの一員として受け入れてくださるあたたかい雰囲気が海士町に漂っていると感じ、自分の偏見に気づかされた。海士町の人々は新しいものに寛容であった。海士町に来て間もない頃に耳にした、海士町の売りは人のよさであるという意味はすぐにこの身で体感することとなった。海士町５日目に設けられた、島留学生やJICAのボランティア経験者の方々との懇親会では自分とはまるで正反対の生き方を学ぶこととなり、海外での活動経験をもたれる方の体験談をお聞きするうちに海外渡航歴のない自分は損しているのではないかとさえ感じた。海外へ行くと１００パーセント価値観が変わるとお話をされていて日本の外への興味が溢れた。また、海士町を巡るうちに、移住者が開いているお店を何件か見つけ、そこでは地元の方にお店が愛されている様子が伺えた。移住者が新しい取り組みを始め、それがきっかけでその土地が活気づく可能性、そして新しい風を取り込む意義を見出すことができた。新しい土地で挑戦中の島留学生や海外で活動をしたJICAボランティア経験者、海士町という土地に移住をして新たに開業をしたＩターンの方々の能動的な生き方を垣間見るという経験をし、自分も何か挑戦をしたいと思うきっかけを与えてくれた６日間であった。

２．スタディツアー参加前に立てた到達目標の達成状況

スタディツアー参加前に立てた、地方創成を行う中での地元の方々との関わり方の習得、海士町ならではのまちづくりや観光の手段についての学習については、JICAの取り組みの説明や海士町の説明を通じて達成することができた。自分の理想ではなく相手に寄り添う提案をすることが大切であり、相手に寄り添うにはまずは相手と共に手を動かすことが大切であると学ぶことができた。海士町ならではの政策については目的に縛られず、見返りをもとめない海士町の強みである自由な交流が推進されていると感じた。次に、海士町の広報活動で意識している点を見つけることに関しては、SNSを島留学生が動かしていることが特徴であると感じた。移住者の視点から海士町の魅力が込められた投稿となるので親しみがもてる理由のひとつとなっているのではないかと思われる。だが、この目標に関しては質問を通してもう少し掘り下げることのできた目標であったと振り返る。最後の、スタディツアーを通して地方で活躍する人物へと近づきたいという目標であるが、知識や思考を取り込むことができたため理想の人物像へ近づいたが、スタディツアーを通し

て価値観がいくらか変化したため地方は好きであるが地方で活躍したいかと問われるとそうとは限らないという心情に変化した。総括すると、達成状況は高いと言えるだろう。

３． 今後の学習や研究に向けた抱負

大学では観光学やまちづくり学を専攻しているので、スタディツアーで養った海士町の政策や考え方をこれからの課題解決学習などにおいて参考にしていきたい。海士町での生活では人との繋がりの重要性やその繋がりが個人に与える安心感について再認識させられたので、人との繋がりが希薄化している都市部においての人との繋がりを得るきっかけとなる場づくりについて学んだりその影響について研究をしたりしてみたいと感じた。また、コミュニティという言葉についての考察もしてみたいと考える。スタディツアー中の先輩方の積極性な学びの姿勢が印象に残っており、次にこのような機会があったら、さらに予習を徹底させて当日は積極的に声をかけたり質問を投げかけたりすることで自分なりの学びを追求していこうと思った。最後に、これからの出会いを大切にしていきたいと考える。

坂爪　里帆

東京女子大学現代教養学部人文学科歴史文化専攻２年

１． スタディツアーを通して感じたと・印象に残ったこと

私は「この地にないものはない」と強く感じた。海士町のスローガンである「ないものはない」という言葉の意味を強く肌で実感することができた。人の温かさに満ち、豊かな自然に囲まれ、多くの方から愛を感じることができる海士町には、大切なものはすべてそろっていた。モノが多すぎる社会で生活している私たちにとって、何が重要なのかと原点に立ち返る経験は刺激的なものであった。私たちは普段、手にモノを持ち過ぎた状態で時間に追われながらの生活を送っている。人の顔を見ることもなく、常に忙しい状況にあるといえるだろう。私の生きる社会には、向き合ってくれる人は多くはない。心にゆとりを持ち、他人と向き合ってくれる環境ではないと言い切れるほどだ。スタディツアーを通して、まちの活性化の姿勢も学べたが、それ以上に人生観が変わるほどの経験や気づきが多くあった。

また、島の方の弱みとも捉えられることを強みに変える姿が印象的であった。ポジティブな考えを持ち、何事にも挑戦する精神が垣間見えた。弱みとも捉えられる場面を補う形の政策はよく耳にする。しかし、弱みを軸に活動する政策はとても新鮮に感じた。

貴重な体験として、どこまでも続く広い世界を堪能できたことが強く印象に残っている。なかでも、天の川を見ることができ、水面が輝く海に飛び込めた経験は自然そのものの美しさ、豊かさを強く感じ、感動という一言では表すことのできないものであった。ツアーに携わる方との関わりから、自分はちっぽけな存在であると実感し、様々な知見を持つ素敵な方とお話ができたことは多くの学びがあった。就職活動が始まる私は、自分と向き合うことが求められる。自分と人と向き合うことの大切さから考えさせられることが多かった。ないものが存在しないほど、多くの豊かさ、学びを経験することができたスタディツアーであった。

２．スタディツアー参加前に立てた到着目標の達成状況

地方創生の取り組みに興味を持っていた私は「地域の特性を発見し活かす力を身につけるヒントを得る」という到達目標を掲げた。事前資料から、海士町は地域課題が浮き彫りである離島のなかでも活動が盛んな地だという漠然としたイメージを持っていた。しかし、実際に実地で研修を受けると、私の持つイメージは、中身のないものであったことに気づかされた。濱中さんをはじめとした海士町で働く方のお話を聞く機会を通して、地域の方とともに作り上げることを大切にした先に、地域の特性が見えるのだと学んだ。はじめから特徴を列挙して利用するのではなく、寄り添い互いに歩んだ先にあるものこそが地域の良さであり、地域の特性といえるのだと学んだからだ。行政側の努力だけではなく、地域の方と手を取るまち全体の努力が必要であると気づいた。地方創生という一言では片づけてはいけないといえるだろう。

また、特徴を活かす取り組みの具体例にも目を向けることができた。そこには持続性の困難が見られた。島前高校生やグローカルプログラム生の考えたプロジェクトが自己満足のカタチである場合、継続されることはないと学んだ。島の人の心を揺さぶり、互いに良い巡り合わせがなければ持続的な活動につながることは難しいのだと気づかされた。

「『共に』という意識」これこそが地域づくりにおいて大切だと考えた。この意識は濱中さん、瞳子さん、阿部さんのお話のなかで共通して話されていた言葉である。手を取り合うことの大切さ、協力し合うことの大切さ、人と人との関わりでしか生まれないものを

感じることができた。海士町で行われている事業を他の地域に活かすためには、その地に寄り添い、共に歩む姿勢が最も重要だといえる。参加前に立てた到達目標に少し近づくことができたといえるだろう。

３．今後の学習や研究に向けた抱負

今回のスタディツアーで物事を多角的に見ることの大切さを学んだ。実際に役場の方やJICA 海外協力隊の方とお話ができたり、島で働く方からお話を伺えたりとさまざまな方との関わりがあった。海士町の取り組みや海士町という島の様子を異なる視点から捉えることができ、また自分なりに海士町に色を付けられたと考えている。

効率が重要視される都会での生活では、何事においても深堀する、違う面から見る時間が確保されていない。私が専攻する歴史学では、どのような歴史的背景のなかで過ごしたのか、その時代背景をさまざまな角度から分析し、人物を歴史に位置づけることが求められている。そのために探した史料を多角的に見る力が要求されていると考えている。今回のスタディツアーでは、私の多角的に見る力のレベルアップができたと評価したい。毎日忙しく動き回り、止まることが非であるかのような社会で過ごす私たちにとって、何かを様々な面から見て考える経験は貴重なものであった。歴史学を探求していく一人の学生として、この経験は必ず生かされる糧となると考える。

また、社会に出て働く際にも、物事を多角的に捉え、検討することは大切であると考える。自分がその地に行き、言葉を対面で交わし、囲まれた環境を知る努力が、物事を体系的に捉えることの第一歩になると学んだ。

多くの学びや気づきを与えてくださった海士町に再度訪れたいと強く願う。島全体が受け入れてくれているかのように感じる海士町の環境に身を置き、新たな発見や忘れかけていた大切なものを感じ取りたい。

島崎　睦巳

奈良女子大学文学部言語文化学科日本アジア言語文化学コース４年

１．スタディツアー全体を通して感じたこと・印象に残ったこと

印象に残ったことは、海士町に様々な出身の様々な年齢の方が移住や留学で滞在していること、そして彼らの話を聞くことが出来たことだ。他の地域に滞在人口や関係人口として関わることの魅力を知るとともに、町にとってそうした人々が与える効果も知った。自分自身、海士町にこれからも関わっていきたいと思うとともに、自分自身の町の関係人口を増やすことにも関心を持った。

２． スタディツアー参加前に立てた到達目標の達成状況

卒業後、地元で地方創生を担っていく際に役に立つ学びを得ること、それに対する自分の気持ちを高めることが私の今回の一番の目標だった。実際に取り組まれていることの詳細な方法までは一週間では到底学びきらないが、海士町の人々の姿勢には大いに感銘を受けた。副町長からうかがった何か楽しいことをしよう、大変でも楽しくやろうというポジティブな姿勢や、10 年以上の時間をかけて粘り強く取り組んでいく姿勢は、対象問わず何かに取り組んでいく中で見習っていきたいと感じた。また、濱中課長から聞いた「意志ある未来」という言葉が、深く心に残っている。離島の際、河添さんからその言葉でもって激励されたことも忘れがたい思い出だ。この二点の目標に関して、海士町から沢山のものを得たと感じている。加えて、質問すること、メモをすることも具体的な目標として挙げていた。島でのメモは、帰宅後も役立ってくれている。質問に関しては、訊きたいことは聞けたが、さらに引き出せるようになるために今後も精進していきたい。

３． 今後の学習や研究に向けた抱負

将来、地元に戻って地方創生に関わりたい、その時のために今できることを何かしたいと考えているときに見つけたのがこのツアーだった。人口維持に対する政策の方針や、役場の人々の姿勢や考え、町の人々の思いを聞くことで、自分がこれから仕事をしていく上で参考にしたいと感じた。今回、海士町で学んだことを持ち帰り、故郷に還元していきたい。

また、卒業までには卒業論文という課題も残されている。私は、卒業論文で伊藤野枝という文筆家の作品をテーマに取り組んでいる。海士町で予期せず感じたことは、伊藤野枝の思想が思い出されるということだった。野枝は、農村の助け合いに理想を見出し、粘り強く明るく活動した女性だ。海士町の人々と接し考えを知るうち、彼女が夢見ていた世界

は、海士町のような社会だったのじゃないかと思った。海士町で見聞きしたこと、その記憶を胸に卒業論文に向かっていきたい。

山本　舞

奈良女子大学文学部人文社会学科２年生

１．スタディツアー全体を通して感じたこと・印象に残ったこと

私にとって最も印象深かったのは、海士町を実際に訪れて自然の中で暮らし島の人と交流をして初めて見えてくる「海士町らしさ」を見つけられたことだ。

一つ目の海士町らしさは、離島ならではの海に囲まれた豊かな地形と自然、道ゆく人の温かさが当たり前のようにあることだ。自然のすぐそばに人の営みが存在し海や山の自然から恵みをもらって住まう生活がある。すれ違う人と挨拶をしたり自分で釣った魚を夕食にしたりすることは島の人にとっては当たり前のことかもしれない。しかし私にとっては新鮮で、同じように都会に住む人を島に惹きつける海士町の魅力の一つだと感じた。海士町に到着した初日から商店で無花果を頂いたり、朝散歩をしている途中で出会った方から隠岐神社のいわれや海士町のことを案内して頂いたりと、外から来た私たちに快く声をかけてくださる方がたくさんいた。海士町には、島のことを大切に思っていて外から来た人にも島のことを知ってほしいという思いを持った方がたくさんいらっしゃることを体感することができた。

二つ目の海士町らしさは、「発想の転換」を柔軟にする人が多いことだ。今回のスタディツアーでの地方創生と国際協力を挙げた町おこしに関わる方との交流を通じて感じたことである。例えば、人口減少が進む中、離島はアクセスや利便性の面で都市に比べて定住人口を増やしにくいということの発想転換についてだ。海士町町役場の濱中さんは滞在人口を生みたいとお話しされていた。海士町で一定の期間を過ごしてみて海士町のことを好きになって応援したいと思う人を増やしたいとのことだ。今回海士町で過ごした間、島留学生や体験生がたくさんの場所で見受けられた。皆島へ来た理由や期間を終えてからどうするのかは様々だが、海士町で自分ができることを探して奮闘されている様子が伝わってきた。

２． スタディツアー参加前に立てた到達目標の達成状況

私は海士町スタディツアー参加前の事前学習の中で、「関係人口」という言葉を初めて知り興味を抱いた。そして、実際に現地でのフィールドワークを通じて地域と多様に関わり活性化を図っている方々と交流し、関係人口の創出がなせる地域づくりの可能性を見つけることを到達目標とした。スタディツアーを終えてみて、この目標を達成することができたと思っている。そもそも関係人口とは、「定住人口」でも観光に来た「交流人口」でもない、地域と多様に関わる人々を指すが、海士町は関係人口の創出に力を入れていた。島留学生・体験生、JICA のグローカル生、私たちのような研修生、県外からの視察者、特産品の購入者、全国にいる島の出身者などである。５泊６日の滞在期間を通じて関係人口の創出がなせる地域づくりの可能性として見つけたことがある。それは、島の人と島外の人との双方が交わることによって新たな気づきとアクションが生まれやすくなることだ。例えば、島の人にとって日常である島前カルデラの景色、海の幸、挨拶が私たちのような島外から来る人にとってはとても新鮮かつ親しみやすいものであることが挙げられる。海士町という離島ならではの魅力に改めて気づくことができたというお話をしてくださった島の方がたくさんいた。逆に、島外から来た方で島の方々の温かく迎え入れる姿勢に支えられ、行動を起こしやすい環境が多いというお話をしてくださった方もいた。このように、別の立場の人が混ざり合うからこそ成せる地域づくりがあるとの発見をすることができた。海士町町役場の方にお話を伺った際、何かアクションを起こす時は面白がってすれば未来に繋がりやすいのだとおっしゃった言葉が印象的だった。海士町の地域づくりも数年で実ってきたものではなく、たくさんの人の関わりを通じて作られた歴史を経てのものだと伺い、人の流動性がある島だと改めて感じた。

３． 今後の学習や研究に向けた抱負

今後の学習における抱負は、二つある。

一つ目は、私が興味を持っている分野である地理学と社会学に関連することだ。興味を持った場所や事象があれば現地を実際に訪れてできれば数日間滞在し歩いて見る。そして、地形の特徴を肌で感じたり地元の人と話したりして自分の身を置いてみることを大切にしたい。今回のスタディツアーでは小田先生、JICA の河添さん、森田さんをはじめたくさんの方々が私たちのために学びの場を準備してくださった。これからは自分自身で少

しでも疑問や興味を持ったことについて視野を広く探りながら行動を起こしていこうと思う。

二つ目は、たくさんの人との関わりは大切にしつつ最終的に自分自身の言葉で考えを言語化できるようになることだ。今回のスタディツアーを通じて、専門分野も年齢も置かれている環境も異なる人たちとたくさん出会えて多くの刺激をいただいた。風と土との阿部さんのお話の中で触れられていた、お互いが何かを得られる相談ができる関係性を築きつつ、自分の軸となる考え方を見つけていきたいと思う。

写真 1：「風と土と」の阿部さんの講義

写真 2：宮岡さんと日御崎神社へ

写真 3：明屋海岸のハート岩前で

写真 4：お世話になった島の方々との夕食会

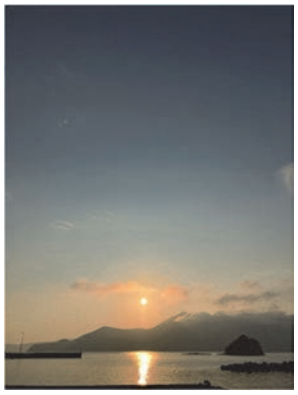


写真 5: 日須賀地区公民館から見た夕日

岩田　綾奈

日本女子大学人間社会学部教育学科４年

今回のスタディツアーを通じて、1.発想の転換の重要性 2.前向きな思考が周囲にもたらすポジティブな影響 3.見返りを求めず感謝の気持ちを表現することの大切さの 3 点を大いに学んだ。順を追ってそれぞれの理由を記したいと思う。

1 点目の発想の転換の重要性は海士町役場 郷作り特例担当濱中香理さんの話で強く感じる場面があった。それは、滞在人口を生み出す仕組みづくりとして「大人の島留学」や「お試し就労体験」を挙げていた際のエピソードである。島内に留まることを強制せず、人の流れをとめないことを大切にすることが重要だと考えているそうだ。そのため島前高校に通っていた子どもたちが海士町に帰ってこないという課題はあるものの、2 割の生徒は島内に残っており、また島から出ていった人も都内で海士町のアピール活動をするといった動きがあるため、気軽に島に戻ってくることのできる施策を講じたと話されていた。この話から置かれている状況や課題をネガティブに捉えるのではなく、その先を見据えて何が求められているかを考える姿勢の重要性を学んだ。

2 点目の前向きな思考が周囲にもたらすポジティブな影響については海士町魅力化政策顧問吉元操さん、副町長中川覚敬さんのお話の中で強く感じる場面があった。それは、人形劇の台本を 1 から作り、プロに教わりながら 6 年かけて全国優勝を果たしたというエピソードである。「やるとなればとことんやる」、「ネガティブにやっても仕方ない」という言葉が話の中で多く登場しており、吉元さんの表情からもこの精神力と周囲に向ける言葉が目標を実現に導いたのではないかと強く感じた。この話から大小問わず何かを実現させたいときこそ、前向きな考えを一貫して持ち、それを周囲に発信していくことが大切なのではないかと学んだ。

3 点目の見返りを求めず感謝の気持ちを表現することの大切さは今回スタディツアーをともにした 7 名の仲間と過ごす日々で実感する場面が多くあった。顔合わせをした当日から、新しく生活をする場所で自炊や入浴の分担を行うことや金銭管理など全員でやるべきことが多くあったように感じる。その中で全員が協力的に作業に取り掛かり、さらには一つ一つに対して「ありがとう」という感謝の言葉を添えていたため、とても気持ちよくそれぞれが役割を全うすることができたように感じた。この経験から、感謝の気持ちを相手にまっすぐと向け、自分なりに表現することの重要性を改めて学ぶことができた。

次に本ツアーの到達目標の達成度について記したいと思う。私がスタディツアー前に立てた目標は「積極性×ワンチーム」である。積極性については、リーダーという役職を務めさせていただいた背景から、町の方々へ質問をさせていただく時間では先陣を切って行動を起こすことができたため達成できたと感じている。またワンチームという点においては、大学も学年も多様なメンバーであったため互いに心を開くまでやや時間は要したものの、最終日の夜には全員で布団を囲み、互いの素敵なところや思いの丈を伝え合うといった密な時間をともにすることができたため、達成できたのではないかと考えている。

最後に今回のスタディツアーでは、実際に話を聞き全身で多くの学びを得ることができたからこそ、心に響くものが多くあった。次年度社会人という新たなステージに立ってからも人と心を通わせること、そして持続性を生むための仲間づくりの方法を模索していきたいと思う。

鏑木　彩佑

日本女子大学家政学部児童学科４年

１．全体を通して感じたこと・印象に残ったこと

海士町スタディツアー全体を通して感じたことは、とにかく人の心が温かいことである。移住者の方や島留学生の方、地元の方など、様々なバックグラウンドを持つ方々とお話をさせて頂く中で、誰も傷つかず誰も悪者にしない言葉選びであったり、大変な素振りを一切見せず朝早くから準備してくださったり、見返りを求めない温かさと優しさを沢山受け取った。海士町の夜は早くて、街灯も少なく、人も島も夜は休めているように感じた。時間に急かされたり、夜遅くまで働いたりしている感じはせず、それが外から来た人を温かく受け入れる余裕を生み出しているのだと思った。「土地が風土をつくり、風土が人をつくる」というお話が印象に残っており、海士町の土地と風土が海士町の温かい人柄をつくっているのだと感じた。

私は一人で過ごすことが好きで、人と心を打ち明けて話すことや、他人と何かをシェアしながら生活することは苦手だと思っていたし、今でもそれが克服できた訳ではない。しかし、その捉え方が自分の中で変化したと思う。スタディツアーに参加する前までは、自分の考えていることは自分で理解していればそれでよいと思っていた。今思うに、それは

人に傷つけられること、自分が人を傷つけてしまうことを避けるために私自身が作り出した思い込みであったのだと思う。私はスタディツアーに参加して、人との繋がりがこんなにも心を温かくしてくれるものなのだと知った。ＡかＢかどちらかを選んで、選んだ方をひたすら一人で抱えて耐えるのではなく、「ＡもＢもあるよね、大変だよね。ところで最近▲がさ、...」とＡとＢを否定せず、どちらも抱えつつも頭の中で占めているものを軽くしてくれて、新しい▲のことを教えてくれるのが、人との繋がりの面白いところだと思った。「面白くないと、5 年 10 年とは続かない」というお話が印象に残っており、この「面白い」は話が面白いというよりかは、いろんな人が関わると予想外のことが起きて面白い、という意味なのではないかと思う。人と関わることは煩わしいものでもあるけれど、一人では得られない気付きや楽しさ、安心感があることに気が付いた。特にシェアハウスでの生活は、分からないことだらけで最初は不安であったが、最終日の夜にはお互いに「ありがとう」を伝え合った。素敵な仲間に出逢えたことに感謝したい。家の中には仲間がいて、家の外には見守って助けてくださる方がいるというのは、都内ではあまりつくることのできない環境だと思う。

また、海士町の人は、島の歴史や食べ物、そして自分自身のことをよく知っている人が多い印象を受けた。一人でいると、自分と向き合う時間が長くなるから自分のことを知ることが出来ているような気がするけれど、そうではなくて、人と会話する中で自分のことを知ったり、島の歴史や伝統が語り継がれたりするのだと思う。伝統が語り継がれるというのは、その地域に人と人の繋がりがあるからなのだと思う。

海士町で過ごして、自然の存在のみならず、人間の存在を身近に感じることが多かった。例えば、手入れをしなければすぐに竹藪になってしまう場所を見て、都内の公園や通学路の雑草など、人間が手入れをしているから人間が生きやすいように保たれているのだと、これまで見えていなかった人の存在に気づくことができた。（お茶大の）有紗さんが振り返りのときに言っていた、「人が通るから道が出来る」という言葉が印象に残っている。

２． 参加時に立てた到達目標の達成状況

私が参加時に立てた到達目標は、「自分の考えを伝えられるようになる」「相手が考えを伝えやすい雰囲気を創る」である。5 泊 6 日の海士町での生活で、到達目標を完全に達成することは出来なかったが、目標に近づくための気づきを２つ得ることが出来た。

一つ目は、海士町では相手を受け入れる心の器が大きいことである。自分も相手も考えを伝えやすい雰囲気があるのは、相手の考えを否定せずに、耳を傾ける器の大きさがあるからだと思う。別の言い方をすると、相手に興味を持っているのだと思う。

海士町に住む方々とお話する中で、共通して印象深かったことは、私たち一人ひとりの話を最後まで聞いてくださったことである。最後まで聞いてから、自身の考えを、言葉を選びながら伝えてくださった。相手が大事にしていることは、その人から話を聞かないと分からないため、まずは話を聞くことが相手を尊重することに繋がるのだと感じた。相手の考えを予想するのではなく、直接聞くことが大事だと思う。自分が大事にしたいことと相手が大事にしたいことのどちらも尊重しながら会話することで、互いに安心して話ができるのだと思う。

二つ目は、「あなたに興味を持っている」と行動で示すことである。今回のスタディツアーでは、自分から積極的に話しかけることが出来た場面と出来なかった場面があった。最終日の懇親会のとき、始めて出会う方や、最近出会ったばかりの方々と話すことが怖くなったときがあり、しばらくお肉を焼いてその場をしのいだ時間があった。しかし、これではいけないと思い自分から話しかけたとき、私が想像していた以上に相手が話をしてくださった。その時思ったことは、相手が自分に興味を持ってくれることは嬉しいことだということと、私はもしかしたら他人に無関心な人間だと思われているのかもしれないということである。相手のことをもっと知りたいと思うのであれば、自分から話しかけてみればよくて、話しかけることは案外相手の迷惑にならないのだと思った。

３． 今後の学習や研究に向けた抱負

私は現在大学 4 年生であり、もうすぐ社会に出て働くことから卒業後の抱負を考えた。

一つ目は、相手の話を受け入れることである。受け入れるとは、話を聞くことに加えて、相手の話を理解しようと努めることだと思う。自分が相手のことを誤解しないために、「こういう風に捉えているけれど、合っている？」と確認しながら会話するように心がける。

二つ目は、「どうしてだろう？」という視点を持ち続けることである。「風と土と」の阿部さんがおっしゃっていた「電車の中で押し合っているおじさんと、山で会っていたら人生語り合っていたかもしれない。どうして自分は満員電車に乗っているのか。この環境がおかしいのではないか。」というお話が印象に残っている。自分の中に生じた疑問を大

事にしたい。人と話すときでも、この人はどうしてそういう考えをするようになったのだろうか、とその人の背景に目を向けられる人になりたい。

３．　訪問記録

（1）JICA グローカルプログラムについて

- 日時：2024 年 9 月 3 日（火曜日）14：30～16：00
- 面会者：海士町役場/JICA 国際協力コーディネーター　森田瞳子さん

- 内容：

グローカルプログラムとは、JICA 海外協力隊開発途上国に派遣される前に 75 日間地域で研修するプログラムのことを指す。①よそ者としての視点・コミュニティへの入り方②課題発見課題解決③地方創生への学びを参加者が育むことが期待されている。海士町では年間平均 3 名の受け入れが行われており、WEB サイトではトップページ写真に海士町が起用されている。また取り組みにも傾向があり、以下の三点があるという。一点目は歴史の掘り起こしである。地域に対する誇りや歴史は重要であると考えられているためである。二点目は産業支援である。背景には担い手不足が深刻化していることがある。三点目は交流事業だ。イベントを通じて海士町の取り組みを知ってもらうといった目的があるという。最後に地方創生×国際協力における重要な視点四点を教わった。一点目は共に手を動かすことである。一方的な提案ではなく、共に動いて知ること・同じ時間を共有することこそが重要であるそうだ。二点目は相手を変えるのか、自分を変えるのかという視点である。後者の自分を変えるという視点は実際に海外赴任の際に生きた経験となったと話す隊員も多いという。また自分の実現させたいことと地元の方々が望んでいることをうまく掛け合わせるとより一層地元の方が背中を押してくれることがあるそうだ。三点目は課題なんてない！？ということ、四点目はこれが日本かあという視点を持つことである。以上の話を通じて、私はどの場所に置かれたとしても自分がどう在りたいかを選択しなければならないこと、そして自分らしさを忘れずに、他者を尊重しともに寄り添う姿勢が大切であることを改めて感じた。

（文責：日本女子大学　岩田）

（2）海士町概要説明および意見交換

- 日時: 2024 年 9 月 3 日（火曜日）
- 面会者：海士町教育委員会共育課長/郷づくり特命担当課長　濱中香理さん

- 内容：

海士町の人口に関連する行政の施策について伺った。

合併についての話が、特に印象に残った。海士町では、過去に合併の話もあったが、平成 15 年に単独町制を選び現在に至っている。そして現在、当時の国の予測よりも緩やかな人口減少率を保っている。自分の出身市である浜松は、合併して政令指定都市になったのち人口減を続け、とうとう今年の初めに区の合併を行ったばかりだ。合併の弊害は他人事でない。就職先の町へ内定が決まった際に、周囲に将来近隣市と合併し、比較的大きい市の職員に自動的になれるのではと言われたこともあった。しかし濱中さんの話を聞いたことで、なるべく独立を保ちたいという意思をもった。

現在海士町の人口は、高齢の住民が亡くなっていくことにより、毎年約 30 人ずつ減っている。この状況下で、需要によって人口を維持するためには、毎年 30 人の雇用の創出が必要とされる。例としては、時代に合わせて異業種に進出して雇用を守ったり、島内にリネン用のクリーニング屋を開設するなど町が関与して新たな産業が起こされたりしている。また、高校の改革や島留学により、滞在人口を増やす取り組みを行っている。高校では、離島というネガティブな要素を転換して、地域の課題が教材となる、島が丸ごとフィールドとなる教育を行っている。島留学では、学生や社会人が一定期間島を訪れ、期間後に留学を延長したり、島内で就職したり、離島後に戻ってきたりする人も生まれている。始めから定着させるにはハードルが高く人が集まりにくいが、短期間まず住んでみて関係性を作ることで、人口増や島外からイベントなどの際に協力してくれる関係人口を得ることに繋がる。少子高齢化社会において、人を定着させるのでは人の奪い合いになってしまうが、そうではなく流動させることが有効となるとのことだ。話を聞いていて、結局奪い合いになってしまうのではと疑問に思っていたところ、環流という考えを聞き興味深く思った。

また、「ないものはない」というキャッチフレーズについて、三つ目の意味として、なければ作ればいいという言葉を伺った。効率を重視しトラブルをなるべく避けるように動くのではなく、過程を重視しトラブルは必ず起きるものとして取り組む濱中課長の姿勢を

伺った。波風がなければ変化はないとの考えのもと、海士町では外の人を取り込んで島に変化を起こしている。海外や他市町村からの人を受け入れる際、トラブルをなるべく避け同じ出身同士でスムーズに過ごしたいという価値観はよくあるものと思う。よそ者と町を良くしていく際のトラブルを避けない姿勢の重要さを確かめると同時に、その姿勢を成功させている事例を知れたことを心強く思った。

（文責：奈良女子大学　島崎）

（3）株式会社　風と土と　講義　「海士町が持つ資源を活用した事業について」

- 日時：2024 年 9 月 3 日（火曜日）16：00～17：00
- 面会者：株式会社風と土と代表取締役、AMA ホールディングス株式会社　取締役
  海士町教育委員、隠岐國商工会理事　阿部　裕志さん

- 内容：

訪問したのは、村上家資料館にオフィスを構える会社「風と土と」の代表取締役である阿部裕志さんである。会社の概要についての 10 分ほどの説明ののちに、学生側から質問や感想をお伝えして 50 分ほど議論を交わすという形での訪問であった。

まず、「風と土と」の会社名についてだが、風は外から来た人のことを指し土は地元の人を指す。２つを助詞の「と」で結ぶことによってどちらか片方だけではなく双方が関わり合って共に風土をつくるとの想いが込められているそうだ。会社の事業内容は大きく３つに分けられる。

一つ目は、地域づくりだ。今回は特に特産品の販路拡大と離島医療についての話をしてくださった。まず特産品について、起業した当初はお米農家さんを手伝う活動を通じて交流していたとのお話があった。しかし、農家さんと関わる機会が増えるにつれて「販路拡大」に貢献できるのではないかとの思いが強くなり、農家さんの声を代弁するためには自らが全責任を持ち、米作りをするという当事者の立場に立つことが欠かせないと考え、実行するようになったという。次に離島医療について、医師が２人のみの海士町で離島医療を支える仕組みづくりや医療技術で変革する医療現場などについて医療関係者や離島関係者を交えた離島医療会議の開催などに携わっている。

二つ目は、人材育成だ。人と人とのつながりが濃く自然豊かな海士町をフィールドに会社の経営者を育てるプログラムを実施している。「自分は何をしたいのか？」を言語化することに注力し将来のビジョンを明らかにするプログラムである。

三つ目は、出版（海士の風）だ。海士の風では毎年３冊を世に送り出す。学生から「本を選ぶ基準は何か」という質問が上がった際、阿部さんは「海士町らしいメッセージを伝える本」を選んでいるとの回答をされた。例えば山中哲男さんの「相談する力〜一人の限界を越えるビジネススキル」という本。相談することについて阿部さんは、助けてもらう側だけでなく助ける側も新しい気づきを得られる相談の仕方が増えると、人と人とのつながりも増えるとおっしゃった。つながりをご自身が海士町で体感されたことで、このメッセージを本という形で島の外にも伝えたいとの思いを持っているそうだ。

阿部さんとの対話を通じて、学生メンバーはそれぞれの考えや悩みを自分の言葉で言語化して伝え、それを受け止め合う様子が見られた。阿部さんご自身も、さまざまな人との対話を楽しみつつこれからの海士町をもっと面白い場所にしていきたいと考えていらっしゃることが伝わってくる時間となった。

（文責：奈良女子大学　山本）

写真：「風と土と」での講義風景

（４）西ノ島みた保育園

- 日時：2024 年 9 月 4 日（水曜日）10：00〜15：00
- 面会者：西ノ島みた保育園園長　北原慎也さん、保育主任　金山未奈さん

- 内容：

園庭の草むしり、運動会で使用する小道具の制作、北原さん・金山さんへの質問、園児

との交流を行った。

安全性と子どもの虫好きを考慮し、除草剤は使用しないという。草むしり中に小さな虫を見つけると、園で大事に飼われている子どもに人気のカエルのさくらちゃんに与えた。先生方が草むしりを行う大変さと、子どもたちが動植物に触れて過ごす環境があることを学んだ。

消防車、消防服、アイスのコーン、魚釣り用の魚など、運動会の小道具は分担して制作した。複数の園児が部屋の窓から「何を作っているの？」と興味深そうに見ていて、好奇心旺盛であった。ある子が魚の写真を見ると全ての魚の名前を言い当て、知識の豊富さに驚いた。保育園は海のすぐそばにあるため、子どもたちも日頃から海の自然に触れることができるのだろうと思った。

他とは異なる園の特徴について尋ねると、都会と比べると子どもらしい素直な子が多いように感じる、とのことであった。その背景は子育てに心の余裕がある親が多いからではないかと話していた。島では通勤時間が短く 17 時頃には終業する。親のストレスが少なく子どもの面倒を見る時間が多いため、子どもにストレスが伝わることもなく親子の絆が深まるのは子育てをする上で理想的な環境だと思う。確かに訪問中、子ども同士のけんかは一度もなく、初対面の私たちにも笑顔で手を振って迎えてくれて、仲間を大切にする優しい子どもたちだと感じた。

最後に園児の遊びに加わることができた。カードゲームやパズル、ブロック遊びなど、思い思いに楽しんでいた。先生が遊びを誘導するのではなく子どもの自主性に任せている点が印象的であった。

保育園の先生方のお手伝いや園児との交流という貴重な体験ができ、島の子どもたちの様子や子育て環境について知る有意義な時間であった。

（文責：お茶の水女子大学　山田）

（５）海士町　日須賀地区

- 日時：2024 年 9 月 5 日（木曜日）9：00～15：00
- 面会者：海士町教育委員会地域共育課　地域共育コーディネーター、ジオパーク特命担当　宮岡健二さん

- 内容：

海士町で一番小さい地区であり、全 14 世帯の日須賀を訪れた。まずは、宮岡さんのお話を聞いた。日須賀というのがどのような地区なのか、グローカルプログラム生の受け入れの歩みや、活動内容などのお話を伺った。宮岡さんは、グローカルプログラム生の受け入れが、日須賀地区のコミュニティ活動の原点につながるとおっしゃっていた。プログラム生の受け入れに際して、マイナスなことはあるのかという問いに、マイナスなことを考えたら、進まないので、プラスなことしか考えていないというお答えがとても印象に残っている。次にグローカルプログラム生が整備した旧通学路を見に行った。一度整備した道に草がたくさん生えていて、歩ける状態ではなかったので、草刈りをした。草刈りが想像以上に体力仕事であること、人が通らないと道にならないことを実感した。また、一度整備された道が元に戻ってしまうことのもどかしさ、継続性の難しさを目の当たりにした。その後、浜辺のごみ清掃を行なった。日本、中国、韓国などのペットボトル等のゴミが広がっていた。30 分程度のゴミの清掃をしたが、ゴミ袋 10 袋近く集めた。しかし、果てしなくゴミは残っていた。宮岡さんにお話を聞くと、多額のお金をかけて業者に頼んで清掃をして、一旦きれいにしても、台風などが一回来てしまうと元通りになるという。最後に、宮岡さんが浜辺で収集した貝で作成した、作品を見せてもらった。その作品は、宮岡さんの優しさ、暖かさ、豊かな想像力がたくさん詰まった作品であった。

（文責：お茶の水女子大学　長束）

写真 1：宮岡さんのお話

写真 2：旧通学路の整備

写真 3：海岸清掃の様子

（6）隠岐國学習センター

- 日時：2024 年 9 月 5 日（木曜日）20：00～21：00

- 面会者：大人の島留学生　吉岡慧さん

- 内容：

隠岐國学習センターとは、島根県立隠岐島前高校と連携・協働した公立塾である。「グローカル人材の育成」という島前高校と共通の目標を掲げ、一人ひとりの進路実現を支援している。写真 1 のように「隠岐学習センター」の看板は表にはないのは、表にきっちり学習センターの名前を出してしまうと入りにくさがあるため、出さずに、誰でも立ち寄れる空間を作っている。看板は、島前高校への坂道とつながる玄関口の「土間」に置かれている。館内には、さまざまなコンセプト、用途に合わせた部屋がある。また、学習センター内の提示物や、本なども工夫が凝らされていた。3 年生の受験サポートで忙しくなる 9 月は 1,2 年生のサポートがなかなか十分にできないと感じ、今日の一言やおすすめの本提示コーナーなどを充実させているとのことであった。20 時ごろにお伺いしたが、島前高校の高校生たちが、たくさんいて、穏やかな雰囲気が流れていた。10 人ぐらいで話し合いしているグループや 2,3 人で話している子たち、1 人で勉強している子本当に様々な状況に対応している学習センターである。高校生の子たちが、あいさつ、話しかけてくれて、週末に控えている文化祭の話をしてくれた。訪問して率直に思ったことは、自分が高校生の時にこの空間に居たかったということである。短い時間しか居ることができなかったが、一人ひとりが、思っていることを考え続けることができ、やりたいことを伴走してくれる、なんだか包み込んでくれる環境が広がっていると感じた。何かに挑戦することに対してとても高いハードルだと感じてしまう性格の私にとって、このような空間があったら、ちょっと後押ししてくれる環境、仲間が広がっていたのかなとしみじみ思った。

（文責：お茶の水女子大学　長束）

写真 1：学習センター入口

写真 2, 3：学習センター内掲示物

（7）JICA 海外協力隊経験者との座談会

- 日時：2024 年 9 月 6 日（金曜日）14:00～15:30
- 面会者：海士町役場/JICA グローカルコーディネーター　河添靖宏さん、海士町役場/JICA 国際協力コーディネーター　森田瞳子さん

- 内容：

座談会を通して、海士町と国際協力の関係について学んだ。

協力関係に至る背景には、海士町の「ないものはない」の精神の下によるさまざまな地方創生の挑戦があった。地域にある資源を活かした地域活性化を行う海士町の取り組みは、開発途上国にとって重要であると注目された。自らの地を捉えた活動は、海外にも役立つものとされたといえる。多様な価値観の交流は、外からの視点を海士町に取り入れることを可能にした。また、海外協力隊の方のＩターンの場となることで、還流を続けることにつながっている。

連携実績として、JICA 関係者の人事交流や研修員の受入れ事業、草の根技術協力、グローカルプログラムと自治体の連携派遣などが挙げられる。なかでも、ブータン国の教育魅力化を図り、高校生を派遣する取り組みである草の根技術協力に注目したい。ブータン国側にも成長や気づきがあるとともに、島前高校生に学んだことを世界に発信する力の育成の場を提供することにもなったと評価されていた。相互の成長があったといえるだろう。これらの取り組みを学ぶことで、私たちは海外との接点を持つことの意義に向き合うことができた。海士町の経営方針である「自立・挑戦・交流」を加速させる取り組みであると学び、島の強みを活かした途上国との関係が読み取れた。島の価値観として、関係性の重要視や共創、余白や裁量が挙げられる。効率を重要視する都会とは異なるものであり、途上国に残る風潮と重なるといえるだろう。

また、SDGs 達成に向けた取り組みともいえる。世界との混じり合いを進める様子がうかがえたからだ。第一歩として、様々な角度から自己を対象化し、現実を目の当たりにする経験が大切だと学んだ。一人の力では変えられない世界の課題を、自分ごととして捉えるための小さな挑戦が求められているだろう。

一方で、取り組みの持続性への課題点も挙げられた。グローカルプログラム生の行ったまちの整備の継続が困難である現状を体験した。開発途上国のプロジェクトの継続性の難し

さと重なる課題であり、共感してくれる仲間づくりが継続的な取り組みにつながると学んだ。

海外協力隊の経験があるお二方のお話から、人とのあたたかなつながりを持つまちという海士町の特徴も捉えることができた。

（文責：東京女子大学　坂爪）

（８）海士町役場幹部との面談

- 日時：2024 年 9 月 6 日（金曜日）13：00～14：00
- 面会者：海士町副町長　中川覚敬さん、海士町魅力活性化政策顧問　吉元操さん

- 内容：

海士町役場 3 階会議室で行われた中川さんと吉元さんとの面談では、海士町で一番心に残ったなにかと感想をスタディツアー参加メンバー８名が述べた後に質疑応答の場が設けられた。はじめの海士町で心に残ったなにかという話題と感想においては、自然の豊かさや自然と隣り合わせの生活について、多くの島の方々とこの５日間関わる中で身をもって感じた町の人のあたたかさや人と人との繋がりの深さが印象的であるという意見が多く飛び出した。島のいたるところに神社や伝承、お祭りが残っていることについて述べられた際には、隠岐神社へのお参りが島民にとっての優先事項のひとつであり、自然と共に生きると自分の力に及ばないところに力が宿っていると感じるからお参りをするのであるとお話された。また、島の方々の前向きな姿勢については意見がでた際、「なにもないからこそ面白いことを考えて面白いことを自分たちでしないといけない。」と吉元さんが話され、ネガティブになっても仕方がないのでとりあえずやってみようという前向きな姿勢がこの言葉からも表れていた。質疑応答では、海士町の政策が他の市町村に当てはまるとは限らないが、視察等を受け入れる際に意識していることについての質問が挙がった。これに対しては、見返りを求めず、隠さずにそのまま伝えるということがまず回答として挙げられ、さらに遠くまで来てくれてありがとうと感謝を伝えているとのことであった。政策においては海士町でないと絶対に成し遂げられないということはないが、成功のためには継続する覚悟と本気が必要であるとのことで、その継続の方法としては面白いと自己暗示する方法が紹介された。「これを乗り越えたらいい思い出になるね。」という考えをもた

れていることも印象深かった。また、海士町ならではの観光政策や関係人口についての質問では、若者に選ばれ続ける島を目指す海士町ならではの回答を得ることができた。それは島留学や島体験を代表とするような気軽に島へ来訪できる制度を充実させていることだ。その理由は、交流する期間が変わるほど訪れる人の層も変わるという点に着目した結果であった。またこちらの回答も来島者に見返りは求めず様々な人に来てほしいという願いが具現化されたものであり、目的に縛られない海士町ならではの柔軟な考えから生まれた制度だ。この面談で初日から実感していた、島に若者が多くまさに海士町が若者に選ばれる島である理由について考えさせられる機会であった。

（文責：東京女子大学　大村）

（9）島留学生・JICA ボランティア経験者・スタディツアー受入関係者との懇親会

- 日時：9 月 6 日（金曜日）17：00～20：00
- 面会者：海士町教育委員会地域共育課　宮岡健二さん、宮岡さんの友人　佐藤公美さん、海士町役場／JICA グローカルコーディネーター　河添靖宏さん, 森田瞳子さん、島前高校　ひとつなぎ部顧問　森田悟史さん（JICA 海外協力隊経験者）大人の島留学／海士町役場郷づくり課　大林芽生さん、大人の島体験　星川七海さん, 佐藤千夏さん, 森優樹さん、海士町立海士小学校　2017 年にソロモン諸島で JICA 海外協力隊として活動　丸山健太さん

- 内容：

今回のスタディツアーでお世話になった方々と共に、日須賀にあるひすか会館でバーベキューをした。宮岡さんと佐藤さんが前日の午前 2 時に船で魚を釣ってくださり、食べやすいようにさばいて味付けをしてくださった。飲み物やお肉、取れたてのお魚で調理した焼き魚とお刺身、サザエ、取れたてのお野菜が並ぶ大変豪華な懇親会となり、準備してくださった方々には感謝の気持ちでいっぱいである。私たちもバーベキューの開始時刻より早くに会場に到着し、準備のお手伝いをした。海士町の方々と一緒に準備したからこそ、お世話になっている森田さんや河添さん、宮岡さん、そしてその日初めて出会った佐藤さんとも距離を少し縮めることができたように思う。お酒を買う時間がなかったと伝える

と、河添さんが「買ってくるよ？」と声をかけてくださり、その優しさと温かさに驚いた。

島体験で海士町に滞在している佐藤さんから、「写真が好きだと海士町に伝えたら、海士町を車で巡って写真を撮影し、冊子にするという業務を任された」というお話を伺った。島体験生の「好き」と、海士町の困りごとや求めていることをシェアして、島体験生のお仕事が生まれているのだと思う。

島前高校に勤務する森田さんに「島前高校の先生は、他の学校の先生とは違うのか」と質問したところ、「優秀な先生はいるが、どの職場でも同じように優秀な人は一定数いて、島前高校に優秀な人が集まっているわけではない。島前高校にも課題はある」というお話をしてくださった。外から見ると良い面ばかりがみえるかもしれないが、地域共創科はまだ始まったばかりで手探りの状態でもあると伺った。

私たちスタディツアーの参加者８人にとっても、この懇親会は互いのことを知るよい機会となった。シェアハウスで一緒に暮らしていたものの、会話をする時間はあまり取れなかったため、懇親会を通して距離が一気に縮まったように感じる。この懇親会は、数日間の滞在する私たちと、数か月滞在している島体験生や留学生、移住者、そして地元の方が混在したものであったにもかかわらず、誰もが壁を感じることなく笑顔で過ごしていたように思う。「自分がここにいていい」と思わせてくれる、素敵な時間であった。

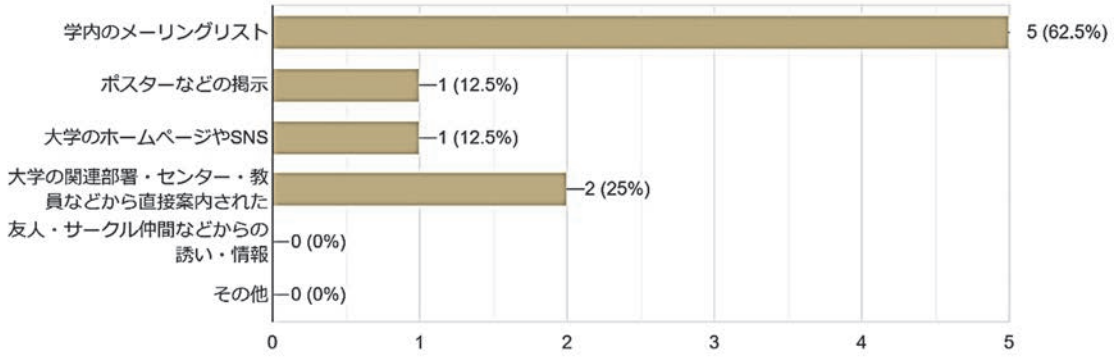
（文責：日本女子大学　鏑木）

４． 資料

（１）参加学生によるアンケート回答

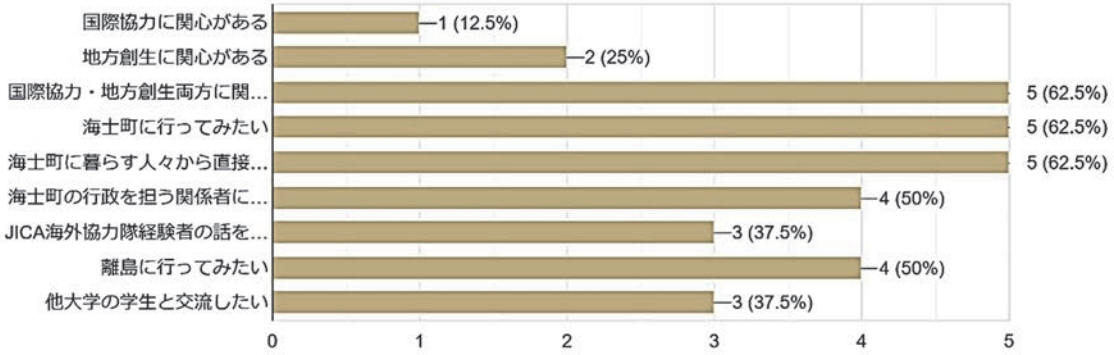
Q1. スタディツアーのことをどのように知りましたか？（複数回答可）

8 件の回答



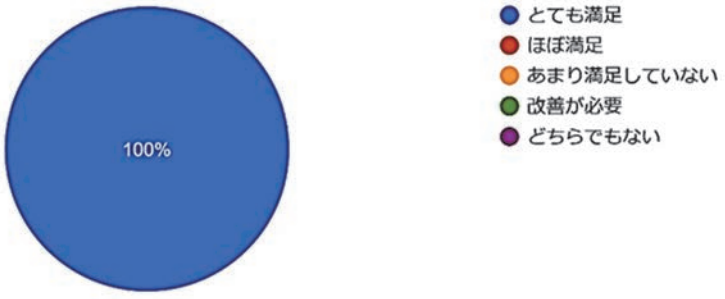
Q2.スタディツアーに参加した理由は何ですか？（複数回答可）

8 件の回答



Q3.スタディツアーの参加満足度を教えてください

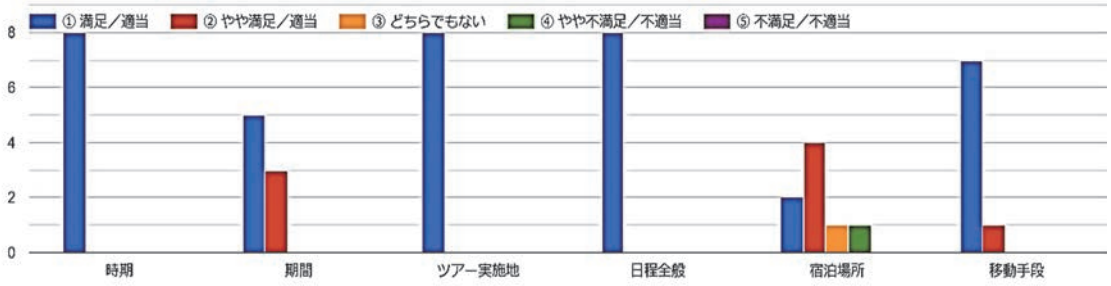
8 件の回答



Q4:Q3 の理由を教えてください。

- 海士町を盛り上げたい！と可能性を探りながら、お互いに関わり合って暮らす島の人達に直接会ってたくさんの学びを得ることができた点。Ｉターンの方、島生まれの方、短期間滞在している方、町役場や JICA の方と様々なバックグラウンドを持つ人との交流をセッティングしてくださった点。
- 観光だけで終わるツアーではなく、地元の方と言葉を交わしたり、海士町の暮らしを体験したりすることができたから。海洋プラスチック問題や道の整備の現状を目の前にして、ほんの少しだけですがお手伝いをさせていただき、海士町のことを知ることができたから。
- 役場の方、JICA の方、住民など様々な人と直接関わり、海士町の地方創生の取組みの背景、島の人の暮らし方や精神を学び感じ取ることができ、想定以上のものを得ることができた。
- 海士町の人々と実際にお話しすることができ、海士町の生活を知ることができたから。
- 学びが多く、楽しかったです。
- 地域の方、スタディツアーに参加した仲間と同じ事物に真剣に向き合える貴重な体験ができたから。
- 朝から晩まで余白なく島での学び、仲間との交流をすることができたため。

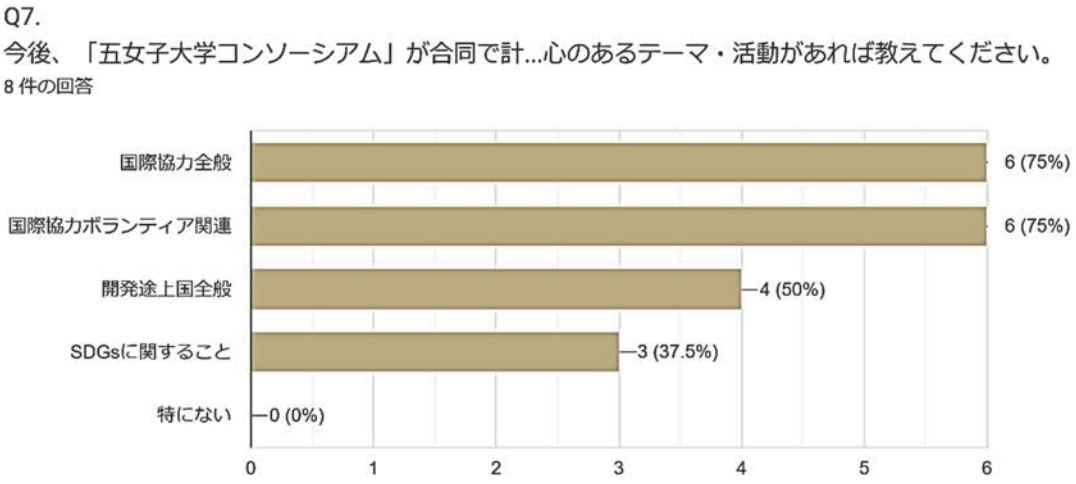
Q5.スタディツアーの時期・期間・場所などについて教えてください（それぞれ該当の箇所にチェックをお願いします）。



Q6:スタディツアー全般についてのコメント

- スタディツアーの名前通りたくさんの学びを培う中で、お話を聞くだけではなくこちら側から感じたことや疑問に思ったことをお聞きして、それに対して真剣に受けとめて議論してくださる方とたくさん出会えたことがとても嬉しかったです。海士町、西之島の観光スポットへ視察に行ったことで二つの島の主要産業の違いを地形から体感し、島前カルデラの壮大さも体感できたこともこころにのこっています。電動自転車での移動はとても良かったです。湾を通ったら坂道を登り下りしたりする中で島の地形を肌で感じたり、海で岩牡蠣の養殖が行われているのを観察したり、通りすがる人との挨拶が生まれたり、あの建物なんだろう？と車では気づきにくい発見が得られたからです。ささめ雪での共同生活では、最初はどうなることかと思いましたが、1 週間を通して参加者のみんなとたくさんの時間を共有しながら団結できる家のような場所になりました。ただ、食事準備や片付け、掃除などについては偏りが生じてしまった部分があると感じます。そこで、もし次回もシェアハウスの形でツアーを行う機会があるならば、例えば食事作りを当番制にするなど役割分担をすることも大切だと思いました！
- 初めて会った 8 人がシェアハウスで一緒に生活し、自炊をすることは大変ではあったが、それがあったからこそ絆が深まったと思う。 シェアハウスのトイレとお風呂が綺麗で、住みやすかった。 海士町が地元の方や、移住してきた方、島留学の方など、いろいろなバックグラウンドをもつ皆様とお話することができて、とても勉強になった。 人のあたたかさに触れ、自分もあたたかく人を包めるような人になろうと思った。
- 講義、ボランティア、観光（アクティビティ）と盛りだくさんでとても充実した 6 日間でした。食べる場所や寝室は 8 人でも大丈夫でしたが、キッチンが全員入るには狭く、トイレと洗面所が 8 人に対して 1 つしかないのは大変で、今後当初の計画通り 10 人で実施する場合はもう少し広いシェアハウスの方が良いだろうと思いました。
- 先生とコーディネーターさんのご意向であったのかもしれませんが、研修やボランティア活動の他に島の方々との自由な交流の場が設けられていたことが特に良かった点になります。最終日のバーベキューの場などで雑談を含め地元の方々と交流できたことで海士町らしさや人のあたたかさを感じとることができました。最終日の午前中が自由時間となったことも嬉しかったです。

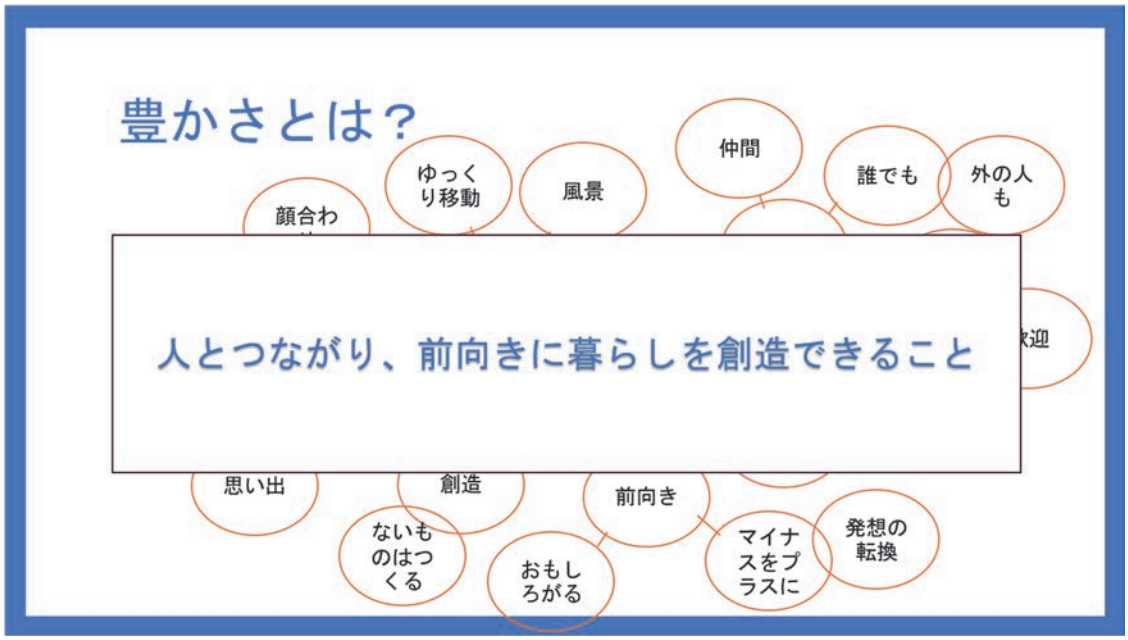
- 本当に海士町の人のつながり、あたたかさ全てを、身をもって実感することができる期間でした。本当に貴重な機会をありがとうございました。
- 始まる前は長く感じていましたが、始まってみるともっと長くても良いように思いました。長い方が得られるものは多そうですが、参加のハードルが上がってしまうので今がちょうど良いのかもと思います。 雑魚寝で一緒に料理をするのは、林間学校みたいで楽しかったです。備品が古いことが、少しやりづらく感じました。
- 活動地が離島であったことが、私にとって貴重な体験をもたらしてくれたと考える。普段とは異なる環境に身を置き、初めて対面する仲間たちと同じ方向を向いて活動することで生まれる感情や思い、学びが得られた。旅行とは異なり、現地の方と意見を交わすことができたこともとても充実した時間となったと考える。
- 入浴⇒近隣の銭湯等、宿の風呂と並行して入浴できるものがあると好ましいと思った。(4 日目に奈良女子大学の山本舞さんがトラックでご一緒した方から自転車に行ける距離に銭湯があることを聞き、半数が銭湯で入ったところスムーズに 8 名全員が入浴を終えることが出来たため。)

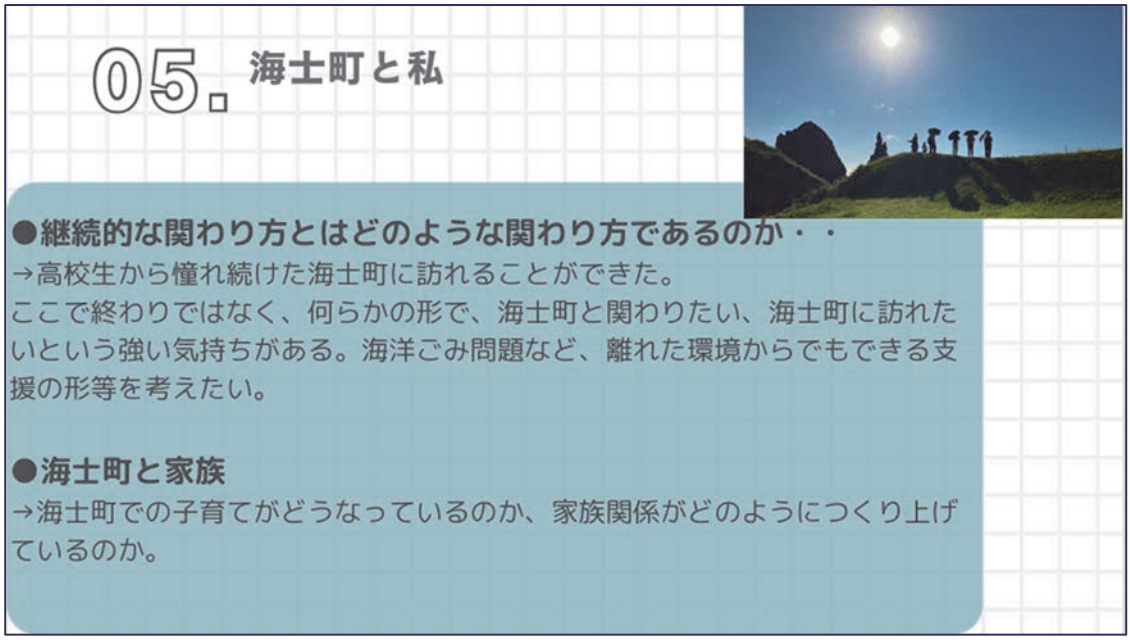


（２）スタディツアー実施中の写真

（3）オンライン報告会（10 月 7 日）の模様

① 学生発表資料（一部）





参加前にたてた目標

・地方創生を行う中での地元の方々との関わり方の習得

→自分の理想ではなく、相手に寄り添った行動をとることが大切。また、共に手を動かすことが相手に近づく第一歩となる。

・海士町ならではのまちづくりや観光政策を知る

→目的に縛られず見返りをもとめない自由なスタイル。地元の方との交流が強みである。

・島外の方に知っていただく、島に訪れていただくための秘訣を知る

→島留学生や体験生による島外の方向けのSNS運用。様々な種類の制度を設けることにより異なる目的をもつ多くの訪問客を獲得。

・地方で活躍する人物へ近づく

→知識や思考を取り込むことができた。

スタディツアーを通して印象に残ったこと

・この地にないものはない

島のスローガンである「ないものはない」という言葉の意味を強く感じた
モノが多すぎる社会で生活する私たちにとって、何が重要であるか考えることができた

・島の方の挑戦する姿

ポジティブに捉え、何事にも挑戦してみようという精神が印象的

・どこまでも続く広い世界

・自分と人と向き合うことの大切さ

様々な知見を持つ方とお話をできたことは貴重な経験
自分という存在に向き合えたと感じている

今後

- 地元に戻り、海士町で学んだことを活かして地域を盛り立てていきたい
- 楽しみながら、継続して取り組んでいく姿勢を見習いたい
- またどこかで海士町に関わりたい

③これからの学びに生かしたいこと

- 興味を持った場所や事象があれば現地を実際に訪れてできれば数日間滞在し歩いて見る。そして、地形の特徴を肌で感じたり地元の人と話したりして自分の身を置いてみる。
- たくさんの人との関わりは大切にしつつ最終的に自分自身の言葉で考えを言語化できるようになること。

03
スタディツアーで学んだ4か条
発想の転換の重要性
前向きな思考が周囲にもたらすポジティブな影響
感謝の気持ちを表現することの重要性
実際に自分の目で身体で経験することの価値

1.全体を通して感じたこと
・人の心が温かいこと
見返りを求めない温かさと優しさを感じた
・人を受け入れる心の余裕があること
夜には人も島も休めている
休める時間があるから、余裕が生まれているのではないか
・島のこと、自分自身のことを深く理解している人が多いこと
人と会話をする中で、自分のことを知ったり、
島の歴史や伝統が語り継がれたりするのではないか

② 報告会参加者写真

五女子大学コンソーシアム
合同国内スタディツアー実施報告書

2024 年 12 月
お茶の水女子大学グローバル協力センター発行

〒112-8610　東京都文京区大塚 2-1-1
Tel＆Fax：03-5978-5546
Email：info-cwed@cc.ocha.ac.jp

五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー
実施報告書

お茶の水女子大学